University of Tsukuba Library

近世中期儒学における唐音　：　平賀中南を中心として

著者	湯沢 質幸
雑誌名	文藝言語研究．言語篇
巻	51
ページ	104(1)-85(20)
発行年	2007-03-31
その他のタイトル	To-in（唐音） in the Japanese Modern Period
URL	http://hdl.handle.net/2241/89203

近世中期儒学における唐音

――平賀中南を中心として――

湯沢質幸

0　初めに

近世十八世紀の儒学における儒書唐音音読の提唱は、訓読しかなかったそれまでの儒学界の人々に大きな衝撃を与えた。それは、それが直読であること、そしてその主唱者が当時隆盛を誇っていた古文辞学派の祖荻生徂徠（1666～1728）やその高弟太宰春台（1680～1747）などであり、この派を中核として実際にそれが行われたということだけによるものでなかったに違いない。すなわち、訓読が血となり肉となっていた人々に対して唐音音読が与えた、奇異にも新鮮にも感じられたであろうその音的な響きにもよっていたのでないかと思われる。ただし、そのような状況下にあっても、圧倒的多数の儒者は相変わらず訓読専用であった。加えて、徂徠春台以後、儒学界に大きな影響力を持つ儒者による、唐音音読の主張も途絶えた。しかしながら、唐音音読支持者がいなくなってしまったというわけではない。本稿はその一人平賀中南（1722～93）の著「赤井通子達校訂」一七七九（安永八）年刊『学問捷径』三巻に焦点を当て、まずは彼の唐音音読論や唐音の取り扱い（方）などを把握し、その後それを踏まえて唐音音読論の歴史における彼の位置を、徂徠や春台との関連において明らかにしようとするもの

である。[1]

＊引用文

①漢文は訓読したものを掲げる。合符や声点などは省略する。特にことわらないものは湯沢。

②句読点や濁点等は、原則として原文に従いつつ、湯沢が適宜施した。また（ ）内も湯沢。

1 学問捷径

中南は独学の人であった。しかし、当時儒学において高く評価されていた黄檗僧大潮（1676～1768）に師事した経験を持っている。そして、唐音はその大潮や彼の弟子、また長崎の通事などから学んだ（2―2―3参照）。ちなみに、大潮は古文辞学派における唐音の有力な師の一人であった。

その書名から察せられるように、『学問捷径』（以下『捷径』と呼ぶ）は儒学入門書である。唐音音読に関わる言及は中巻以降にある。以下、本文の順序に従いながら内容をとらえていってみたい。

2 中南における唐音

2―1 平仄

中南は、巻中[2]の一節「作詩法」の中の一項において平仄を取り上げ、次のように述べる。

a平仄ハ此方古来ヨリノ教ヘニ二四不同二六対下三連…トアリ。コレ唐ヨリ伝来ノ法ト見ヘタリ。コノ通リニテ宜シ。コノ上ノ事ハ唐音ヲ知ラザレバユカヌナリ。近来此ノ間ノ諸先生委曲ニ法ヲ立テ、五七同声仄間平ヲ忌ナド、アレドモ、唐音知ヌ者ノ韻鏡ヲ説ゴトク、何ノ益モナキ事ナリ。[3]其説ハ末ニ記ス。古来ノ説良法ナリ。大抵コレニテヨシ。又大抵和音ニテ口ザハリノヨキハ唐音ニテモヨシ。声律トテ外ノ事ニアラズ。口

ザハリノミナリ。精密ニ声律ヲ正ス事ハ、所詮唐音ナラザレバユカヌ事ナリ。詩ノミニアラズ。文章モ唐音デ唱テ見ネバ、口ザハリシレヌナリ。助字ナドハ尚サラナリ。　中七ウ

平仄のことは中国のそれにのっとった古来の原則に基づいて行えばよい、しかしさらに「上ノ事」を目指すとなると、唐音を知らなければ致し方がない、つまり「口ザハリ」＝「声律」を正すことは唐音によらなければ行えない、これは漢文を作る場合も同じである、特に「助字」の用い方においてはそうであると言う。平仄など「声律」がとりわけ大切な詩だけでなく、漢文にも唐音が必要であるとしている点が注目される。いずれにしても、この一連の文には中南の、〈立派な漢詩文を綴るには唐音音読が不可欠である〉とする、唐音に対する絶大な信頼が現れている。[1] なお、「声律」あるいは「口ザハリ」とは、総じて言えば韻律の意と解されるが、「口ザハリ」という語自体や、唐音は当時実際に発音されるものであったことなどから、中南においてそれらはすべて具体的な音声のレベルにおける存在であったとしか考えられない。

2—2—1　声律（1）

同じ「作詩法」の中の別の一項においても「声律」について論じる。

b詩ハ諷詠ノ物ニテ声律第一ナリ。サレドモ唐音ヲ知ラネバ、声律ヲ正ス事能ハザルナリ。中十四オ

このようにここでも詩作には唐音が必要不可欠とする。そしてその後具体例をいくつも挙げ、また彼の唐音の師大潮の言葉なども引きながら、平仄や「声律」はやはり唐音との照応を通して始めてその当否が分かるということを詳しく述べ、「声律ノ事ハ唐音ヲ知ラネバ所詮アカヌ事（中十五オ）」と、唐音不可欠の主張を繰り返している。

2—2—2　声律（2）

「声律」については、さらに次のように述べる。

c凡ソ詩文ドモニ唐ノ声律ハ日本人ノ及バヌ事ナレバ、タトヒ才学ハマサルトモ、詩文ニ於テハ下劣ノ唐人ニモ、三舎ヲ退ネバナラヌナリ。シカラバ長崎ニ往テ通事ニ受ベシト思フベケレドモ、今ノ通事カヤフノ事ハ

曽テ知ラヌナリ。凡ソ詩ハ諷詠ノモノナレバ、読ヤウアリ。今ノ通事詩モ詩経モ平常読書ノ通リニ読ユヘ声律一向ニ分レズ。中十六ウ

日本人は唐音を完全に習得できないから、「声律」をまっとうするのは無理である、だから「下劣ノ唐人」であってもその人に「声律」のことは教えてもらわなくてはならない、しかしながら、唐音を自在に操る通訳に「声律」のことを聞きただそうと思っても、彼には詩文の「諷詠」や「読ヤウ」など分からないから無駄である、とする。文面にそれと示していないが、学問のない中国人もまた「諷詠」には無縁なはずだから、彼もまた詩文作成に際しては役に立たないと中南は見ていたに違いない。

2―2―3 通事と唐音矯正

通事の、日常使っている不正な唐音による不正な「声律」について、さらに次のように続ける。

d今ノ通事、韻鏡ハ唐音ヲ正ス書ナル事ヲ知ラズ。名乗ヲ返ス書ノミト思フテ居ルヤウノ浅間シキ事ナリ。是ニ達セシハ大潮和尚ナリ。中十七オ

この後、唐音での「詩ヤ詩経ノ唱ヘヤウ」は大潮の弟子に教わったことや、大潮の唐音の師のこと、[5] 大潮の唐音の優れていることなどを述べる。ここで看過できないのは、中南が当時の中国音である唐音をそのまま用いて詩文を読むことを必ずしも是としていない、と言うよりむしろ排して、『韻鏡』で正した唐音でもって読むべしとしている点である。中国のどの地の方言音であれ、当時の中国音たる唐音が全面的に『韻鏡』の規矩に合っていたなどということがあるはずがない。このことや前述のように大潮は古文辞学派の唐音の師であったことなどから、右の文は、大潮や中南また古文辞学派の人々など、唐音音読論者の間では、いわば改正唐音が広く用いられていたことを示唆している。

2―2―4 対唐音不要論

前項で紹介した読書における唐音についての言及の後、「今ノ人唐音ハ詩文ノ用ニハナラヌト云（中十七オ）」という意見つまり唐音不要論への反撃を始める。すなわち、唐音を知らないために漢詩文における「声律」を誤

ってしまったことを具体例に沿いつつ説明し、「声律ト云ハ口ザハリ」のことであると述べ、次いで、和歌を引きながら「声律」が整っていない詩文は唐人には見せられないとする。そして、次のような言葉でこの項を終える。

e予唐音ニテ詩文ヲ作ル事ハ能ハザレドモ、和語ニテ作リ唐音ニテ諷誦シテ必ズ正ス。中十七ウ

この一文は、彼における実際の漢詩文作成の過程を物語っているものとして見過ごせない。文面だけでは作り方の具体的な内容などよく分からないが、この文や既に見てきた、それ以前の言及、さらには以後の説明（2―5―1h・2k）などから、彼は〈まず最初に日本文を作り、次にそれを中国語訳する、その過程で唐音音読をして「声律」（や「助字」「意思」など）を整える〉という手順で漢詩文を作っていたことが知られる。言うまでもなくこれは、唐音音読は漢詩文作成上不可欠だとする、彼の主張を裏付けるものとなっている。

2―3　南郭（1）

同じく「作詩法」の中の次の、「唐ニモ音ニテ口合ヲ風流トシテ用ル事アリ（中十七ウ）」という書き出しの一項で、中南は肥前に大潮を訪れた時彼から直接聞いた話として、次のようなエピソードを披露する。

f南郭校訂の徂徠集を中国に紹介するのは恥ずかしいことだ。なぜなら、中国人に見せても十分通用する、唐音に通じた徂徠が「口合」＝同音異義語を「風流トシテ用」いて作った詩の、その語句を、唐音を知らない南郭が直してしまっているからだ。[6]

徂徠の「風流」が当時の中国人に本当に理解されるようなものだったのかどうか知るよしもないが、徂徠門下にあって文学で名高い南郭が唐音を知らなかったために演じた「失態」を、大潮が非難していることを通して、中南はここでも、儒学特に漢詩文作成には唐音によってそれを唱えてみることが必要不可欠であると訴えている。なお、fの後ではさらに、唐音が有益なことを述べた大潮の別の話を紹介している。

2―4　南郭（2）

次の項においても南郭非難を通して唐音音読有益説を説く。中南が長崎に遊学した時唐音に習熟し、漢詩文作

成におけるその効用を確信したことがうかがわれる。

g予前方南郭集モ一覧セシガ、長崎以後ハ絶テ見ズ。イカサマ南郭ハ唐音ヲ知ラヌ人カ。中十九オ

続いて唐音の有益なことを実例でもって説明する。すなわち、〈ある集まりで南郭の詩を誉めた人がいた、しかし、その「鶴脊関西天目山」という句を「窃カニ唐音ニテ唱ヘテ見シニ声律甚ダ協ハ」なかった〉ことを、各漢字の声調の分析を行いつつ述べる。一代の文学者南郭を引き合いに出して行った、彼の唐音音読論は、儒学を学ぶ当時の人々に相当な衝撃を与えたのでないだろうか。

2―5―1 唐音論（1）

巻下冒頭の項で、改めて儒学における唐音について自説をまとめて述べる。

h漢ノ文ヲ学ブニハ先ヅ唐音ヲ学ブヲ要トス。唐音ニテ書籍ヲ読ミ漢語胸臆（左注ムネノウチ）ニ浹洽（同シミワタル、）スレバ、文章ヲ書ニ臨ンデ自然ニ発出シテ唐人ト異ナル事ナシ。和語ニテ書ケバ善ク心ヲ用ル者ハ顛倒錯置等ノ事ハアラザレドモ、助字ニ至テ其安排覚リガタシ。下一オ

読書においてはもちろんのこと、日本文を中国語訳する際の、特に「助字」の「安排」においても唐音音読は大いに役立つとする。なお、中国語訳の時の唐音の効用については既に述べている（2―2―4、2―3・4）が、ここでは「声律」ではなく「助字」に焦点を当てている点が異なる。

続いて音読のいわばニュアンスについて述べる。

i其外字句ノウチニ言フニ言ハレヌ意思アリ。コレハ唐音ニ熟セシ人ナラネバ知ル事能ハズ。下一オ

右のように述べ、次いで、唐音は大いに役立つ、しかしながら、五年や七年で唐音に熟達するのは無理である、またよしんば唐音に「成就」したとしても、その後「漢語」すなわち中国語を会得しなければ何もならない、だいたいそのために長崎の通訳は朝夕中国人と親しく話をしているのだと続ける。さらに、そのような努力をしている通訳でも「雅語ニ至テハ唐音ニテ通ズル事能ハズ」「（だから、長崎通訳も）文章ヲ書ニモヤハリ和語ニテ書クナリ（下一オ）」とする。ここの「雅語」とは、その「雅」や「唐音ニテ通ズル事能ハ」ざるものであること、

また「文章」の元になるものであることなどから、中国古典ないしそれに準じた書物に範をとった漢詩文を言うものと解される。

そして最後に、唐音音読から始めてしかるべき漢詩文を書けるようになるには「許多ノ年月」が必要とされる、しかしそうすることこそ儒学を極める上での「至極最上ノ良法（一ウ）」なのだとまとめる。

以上、ここでは通訳も成し遂げられない儒書唐音音読と、それにともなう彼の漢詩文作成法を説いている。

2―5―2　唐音論（2）

2―5―1の後、次のように述べる。

j又字音（唐音）ノ正シキ事ハ得ズトモ四書五経等ヲ（唐音で）ナラヒ受レバ、大低文字モ読マレ知ラメ。字ハ反切ニテ読レテ僅ノ功ニテモ其ノ形似ヲ得テモ、其ノ業ハ成就スルナリ。シカアレバ何分唐音ガヨシ。此ノ按排ハ唐音ヲ知ルモノニアラザレバ知ル事アタハズ。下一ウ

儒書を唐音音読で習えば大体の文字を読むことができるようになり、学業は成就する、この点においても唐音を学ぶのがよいとする。その後、次のような言葉でこの項を締めくくる。

kサレドモ唐音ハ長崎ニ限ルナレバ、海内ノ文章ニ志ス人悉クコレヲ学ブ事能ハズ。シカレバ和語ニテ書ザル事ヲ得ズ。和語ニテ書クハ古文ヲ和訓ニテ仮名書ニシ、ソレヲ漢字デ復訳スルニシカズ。下一ウ

皆が皆唐音を完全に習得することはできない、仕方がないから、大方の者は、まず「古文」を和語で仮名書きし、それを中国語訳するしかないと言う。「古文」とは日本古来の文すなわち日本文語文の意と解されるが、唐音音読の必然性、効用を強く主張しながらも、実際に漢詩文を書くという段階にあっては唐音の壁に突き当たってしまうと言い切る。そして、それは一般の日本人は唐音を学ぶ機会に恵まれないためであるとしている。しかし、2―2―2・4、また2―5―1などを踏まえると、根底において中南は、日本人は所詮日本人であり中国人にはなれない、だから中国人のように最初から中国語で漢詩文を書くことはできないと認識していたように思われる。

2―6 助字

漢詩文の読解作成における「助字」の取り扱い方を述べた項において、「是レ等ラ（助字）ノ安排ハ唐音ニ熟スレバ知ル、ナリ（下八オ）」と、また、漢詩文作成に際しては「之」や「於」を用いたり省いたりするが「是ハ文章ノツリ合ニテ、唐音デナケレバ知レヌナリ（下八オ）」とし、「凡ソ助字ノ多クハ声音ニ預ルト知ベシ」と結ぶ。すなわち、この一連の文は、2―5―1hで紹介した中南の言及の最後尾と同じことを、具体例を挙げつつ述べているものと言える。

2―7 地名

「称呼」の項において、「徂來老爺ノ考ヘニ（日本の国名は）此間古ヨリヲノコロ島ト称ス（下十六ウ）」と、その説が徂徠説の引用であることを示しつつ、その理由は「倭奴国ノ唐音（は）ヲノコ」である点にあると述べる。

3 中南と徂徠春台

本節では、前節で紹介した唐音の取り扱いに関わる中南の発言を、唐音音読論の先人、徂徠及び春台[8]のそれと照らし合わせて、両者はいかなる点で共通し、またいかなる点で相違するのかを追ってみる。ちなみに、中南の唐音に関わるその言及において、徂徠や春台の名や著書名あるいは著書からの引用などは2―7以外には見られないが、他のことを述べている所においてはしばしば現れている。

3―1 「2―1平仄」関係

中南がその必要性を強く主張する、平仄における唐音について、徂徠と春台が直接言及している所を見いだすことはできない。ただ、春台は『倭読要領』（以下『要領』と呼ぶ）で次のように述べている。

中華ノ音ハ、諸ノ韻書ニアラハセル如ク、四声七音（セイ イン）、清濁開合（セイダクカイガフ）、種々ノ呼法（シユ ヾ コハフ）（左注ヨビヤウ）、韻韻格別ニ

シテ、甚精微ナリ。上八オ

この一文は、平仄についても唐音音読が有用という中南の説に結びつかないでもないように思われる。

また、『要領』の次の一文は、あるいは中南の「大抵和音ニテ口ザハノリヨキハ唐音ニテモヨシ」という見方に通じる所があると言えるのかもしれない。

総ジテ読書ハ、華音ニテモ倭読ニテモ、人ノ耳ニ入テ聴ニクカラヌ様ニ面白キ様ニ読ム。是亦一ツノ用心（左注コヽロカケ）ナリ。下二六ウ

ところで、中南は詩だけでなく漢文にも唐音音読が欠かせないとしているが、徂徠や春台にそのような言及は見いだせない。ただ、春台には、訓読の害を述べた後「文章」作成に言及した、次のような一文がある。[9]

況ヤ文章ヲ作ルニ至テ、倭語ノ習除カザレバ、必字義ヲ誤リ、顛倒ノ弊去ラザレバ、必文理ニ違フナリ。『要領』上十四オ

これは、あるいは春台が唐音音読は漢詩文作成にも有用であると見ていたことを示すものと言えるのかもしれない。

なお、「助字」のことは3―5―1で触れる。

3―2―1　「2―2―1声律（1）」関係

2―2で紹介した、漢詩文の作成に唐音が必要であるとする説については、平仄の場合と同じく3―1で紹介した『要領』中の一文があるいは関係があると言えるのかもしれない。なお、詩の「諷詠」と唐音との結びつけも、徂徠や春台には見られない。

3―2―2　「2―2―2声律（2）」関係

2―2―2や3で紹介した「通事」に関して中南が述べていること、すなわち通訳における「声律」や「諷詠」について、徂徠や春台に触れる所はない。

3―2―3　「2―2―3通事・唐音矯正」関係

中南の、通事が『韻鏡』による唐音矯正を知らないことの指摘は、徂徠や春台などにはない。ただし、『韻鏡』が漢字音を正すための書であるとする説や実際にそれで正したりすることは、未刊の著であるが徂徠が一七二四（享保九）年に著わした『韻概』（六六九・六七三・六七五頁など）で述べている。また、春台も一七四五（延享二）年序『斥非』（一四八頁）で触れている。

3―2―4　「2―2―4対唐音不要論」関係

不要論の紹介やそれへの反論は、徂徠や春台には見られない。また、不要論に関わる、唐音と「口ザハリ」とのこと、唐音との関わりにおける漢詩文作成の手順などについても、徂徠や春台に触れる所はない。

3―3・4　「2―3・4南郭（1）（2）」関係

唐音に関して、南郭に関わる言及は徂徠や春台には見られない。

3―5―1　「2―5―1唐音論（1）」関係

中南は儒書唐音音読を最高の読書法としている。もとより徂徠や春台も同様である（一七一四（正徳四）刊『訳文筌蹄』（初二ウ、七オウ、以下『筌蹄』と呼ぶ）、『要領』（上二オ、中三八オ、下二三ウ）など）。なお、中南の、唐音と「漢語」「文章」「雅語」などとの結びつけ、すなわち漢詩文作成において唐音音読が不可欠であるとすることに対応するような言及については、3―2―1と同様、3―1における平仄の場合に準じる。

ところで、中南は漢詩文の作成における唐音の効用については、「（唐音音読をしないと）助字ニ至テ其安排覚（アンバイサト）リガタシ」と、「助字」において特にそれが顕著であるとする。これは2―1で紹介した「詩ノミニアラズ。文章モ唐音デ唱テ見ネバ、口（クチ）ザハリシレヌナリ。助字ナドハ尚サラナリ」と、意が共通している。すなわち、彼は「助字」について繰り返し唐音音読の益を述べている。既に見てきたように、徂徠や春台にはもともと漢詩文作成における唐音について、少なくとも積極的、具体的、明示的に述べる所はない。その中にあって、こと「助字」に関しては二人に次のような言及が見いだされる。

①徂徠＝唐音に対する「方言（日本語）」に関して、「其の、『也（や）・矣（い）・焉（えん）』の類、方言（日本語）の訓（くん）ずべきも

の無くして、而も此の方の助声も亦た文字有ること莫きときは、則ち彼此の語脈、文勢転析の則、自ら殊なることを知るなり」（『筌蹄』五四八頁、戸川芳郎訓読）と述べている。また、『護園随筆』でも、「和訓顛倒」の結果漢詩文作成において生じる問題を指摘する中で、「而」「則」「者」「也」などの使用における誤りがあることを述べた後、「殊に知らず、文章おのおの体格あり。故に多く助字を用ふる者、少なく用ふる者、全く用ひざる者あり、みなその声勢語気如何んと視るのみ（三二五頁、西田太一郎訓読）」としている。

②春台＝「倭読ニハ助語辞ヲ捨テ読マザル故ニ、アラユル助字皆無用ノ字トナリテ、自然ニ華語ノ意味ヲ失フナリ。」『要領』（上十三ウ）　「助字」は「助語辞」と同義と言えようが、読書において、訓読では読まない（ことが多い）「助字」をどう取り扱うかは、しばしば儒者の話題になっていたことが知られる。

徂徠においても春台においても、唐音音読は、「方言」での読みすなわち「倭読」＝訓読と常に対立的に取り扱われている。このことを顧みると、これら両人の発言は、漢詩文作成との関わりを文面でこそ明示していないものの、暗に〈唐音音読をすれば、読解や漢詩文作成において「助語辞」の処理を誤らない〉ということ、すなわち、中南の〈唐音音読は「助字」の「安排」に必要不可欠である〉という説に通じることを述べていないでもないように思われる（2―6参照）。なお、中南は唐音音読の効用を述べるに際して、それによれば「言フニ言ハレヌ意思」すなわちニュアンスを感得できるとしているが、この点に関して徂徠や春台に触れる所はない。また、中南の、通訳は「雅語」には通じていないため、漢詩文を中国人のように作ることはできないとしていることについても、徂徠等には述べる所がない。

3―5―2　「2―5―2唐音論（2）」関係

中南の、儒書の唐音音読が漢字音の習得に大いに役立つということについて、徂徠と春台に触れる所はない。しかし、唐音音読論者にとっては、彼が正音と認める唐音による音読は必然的に正しい漢字音の習得に通じるということになるはずである。特に春台は、唐音によって呉音漢音の正否を判断したり（『要領』上八オ）、漢字音の矯正には韻学が必要であるが、それは唐音（「華音」）で行われなくてはならないと明言していたりしている（同

十七オ)。『要領』がどのくらい中南に影響を与えているのかは今後の課題とせざるをえないけれども、少なくとも徂徠や春台との関係にあっては、中南の言及の、その萌芽は徂徠や春台にあったと言ってよいように思われる。

一方、唐音音読断念の理由として中南は、学習の機会に恵まれないことを挙げている。これは徂徠と同じである(『筌蹄』五五六頁[10])。また、春台は「吾国ノ人ニシテ、華音ノ読ヲ習フコト容易ナラネバ、已コトヲ得ズシテ、倭語ノ読ヲナスナリ(『要領』上二オ)」、あるいは、「若真ノ華音ヲ知ントオモハヾ、其師ニ就テ問フベシ。筆札ニ見ハシガタシ(同八ウ)」などと述べているだけであるが、もちろんこれは中南に反するものではない。

なお、2―5―2にも中南の、唐音音読と漢詩文作成との強い結びつけが認められるが、この点については3―2―1などと同様に3―1平仄の場合に準じる。

3―6 「2―6助字」関係

唐音と「助字」との結びつけているこの項については3―5―1参照。

3―7 「2―7地名」関係

中南みずから、ことここで取り上げている地名については、解釈を徂徠によっていると述べている。

4 近世唐音音読論の歴史における中南

これまで、唐音や唐音音読に関わる中南の言及を整理し、次いで彼を先人徂徠及び春台と比べてきた。それぞれの項目においてしかるべき言及に基づいた比較が必ずしも十分行えたわけではないが、その過程においておのずと中南の特色が浮かび上がってきたように思われる。以下この節では、折々彼ら以外の人物の言及も視野に入れながら、それがどのようなものなのかをまとめ、その後、そのまとめに基づきながら、徂徠や春台が中心となっている唐音音読論の歴史において、中南がどのような位置にあるのかを、追ってみる。

4―1 中南の特色

4―1―1　唐音と漢詩文作成

中南の言及を通して見てみると即座に、彼は唐音に関しては「平仄」「声律」「口ザハリ」「諷詠」「助字」などといった漢詩文関係の語を用いつつ、また時には実例やエピソードを交えたり鑑賞にまで話題を広げたりしながら、徂徠や春台が少なくともそれと明言していない〈唐音は漢詩文作成に不可欠である〉ということを一貫して述べていることが分かる。[11] それは、これまで紹介してきた彼の唐音関係の言及において、漢詩文作成に全然関係がないものは唯一、地名について単純な説明を施している2―7だけであることに端的に現れている。もとより中南は2―5や3―5に見られるように、徂徠や春台と同じく儒書読書における唐音音読の必要性を認めていないわけでもなければ述べていないわけでもない。しかし、その2―5においても話題は結局作成の方に向かっているのである。ちなみに、儒書音読に関わっては『捷径』の冒頭に次のような一文もある。

我ガ日本人ノ唐山ノ学問スルハ、唐人ヨリモ一倍ノ工夫ヲ費ス事ニテ、甚難キ事ナリ。何ントナレバ、唐山ノ書ノ文理モ分レ字義モ詳ニナリ、無点物サラ／＼ト読マル、ヤウニナル、是学問ノ半功ナリ。カヤウニナリテ唐人ノ無学ノ人ト平等ナリ。上一オ

「無点物」とは訓点のない書物のこととしか考えられない。つまり、中南は読書は一般に訓読で行うということを前提としてこの一文を書いていると解される。もし徂徠（『筌蹄』五五五頁）の言うような、唐音音読を大前提とする「最上乗」の読書法を中南が初学者に求めていたのだったとしたら、「唐山ノ書ノ文理モ分レ字義モ詳ニナリ…唐音ニテサラ／＼読マル、ヤウニナ」って初めて「唐人ト平等」になると書いたに違いない。否、唐音音読の大先達、徂徠と春台が結局少なくとも全初学者における儒書唐音音読を断念したことからしても、中南が儒書唐音音読を彼の読書法の中心に据えたなどということは考えがたい。いずれにせよ、儒書唐音音読は儒書唐音音読として決して軽んじてなどいなかったという含みにおいて、彼は『捷径』で漢詩文作成においても唐音音読が不可欠であるということを特に強調しようとしていたのであり、そして、それこそ徂徠や春台との関わり合いにおける彼の最大の特色であったと考えられるのである。

なお、このことに関しては、もちろん自身の、唐音を利用した漢詩文の作り方(e)を披露している点もまた、中南の特色の一つとなっている。

4―1―2 唐音音読と通訳（及び中国人）・唐音習得の困難さ

中南は唐音音読論を、日本儒者だけでなく通訳（や中国人）にまで範囲を広げて行っている。[12] また、みずからの直接体験や見聞を通じて、日本人にとって完全な唐音習得は至難の業であると断言する。[13] これら二点は、見てきたように、徂徠や春台との関係においては、これもまた彼に至って初めて見いだされるものである。

4―2 中南の特色と位置

徂徠と春台との関わりにおいて右に述べてきた中南の特色は、すべて徂徠以降の唐音音読論における彼の位置を反映するものにほかならない。すなわち、2―7や4―1―2で述べたような、唐音音読の要不要についての周辺的なことはともかくとすると、彼は徂徠達の儒書唐音音読論を踏まえつつ、漢詩文作成における唐音論を積極的に展開した人物であると位置づけることができる。

ただ、ここになぜ彼はそのような位置にいたのか、なぜ漢詩文作成面に力を注いだのか、という疑問が生じてくる。以下この問題について、日本における儒書読書や漢詩文作成のあり方など踏まえながら考察してみる。

4―2―1 漢詩文作成面への傾倒

彼が漢詩文作成における唐音に傾倒したその理由は、実は既に2―2―4で見た。つまり、当時唐音音読は漢詩文の作成には役に立たないという批判があったので、[14] 彼は唐音音読論者としてそれに応えたのである。しかしながら、これはただ単に事実関係をなぞっているにすぎない。なぜなら即座に、ではなぜ彼に至ってそれが問われるようになったのかという問題が残されるからである。

4―2―2 読書と漢詩文作成とにおける唐音

徂徠と春台は儒書唐音音読の提唱と実行に力を注いだ。これは書物を通しての外国文化摂取のあり方を顧みると、至極当然のことである。なぜなら、一般にこのような場合、その第一歩はその外国の書物を読むこと、特に

その外国語の音でもって読むことに始まるからである。[15] 日本儒学の場合、おおよそ中古初期以前は音読が（も）行われていた。しかし、中古中期以降はほぼ訓読のみとなった。そこに、その当時の中国音たる唐音を知った儒者が現れ、そしてその中のある者が唐音音読を主張し始めたとしても、それは特に不思議なことではない。例えば入明禅僧桂庵玄樹（1427～1508）はその内の一人である。いずれにしても、唐音音読を知った者の一人として徂徠達が、何はともあれ儒学受信の第一歩である読書の場で唐音音読を採用すべきと述べたのは、必然の成り行きだったと考えられる。[16]

では、一方の漢詩文作成における唐音の場合はどうなのだろうか。

書物を通して行われる外国文化受容の最終段階においては、その外国語でもって新たに文を作ることが行われる。読書を受信とすれば、これはその外国語による発信ということになる。日本儒学にあっては書記言語たる漢詩文の作成がそれに当たる。この場合、受信が先、発信は後、という順序は不変である。もちろん、当初はともかく漢詩文に慣れ親しんで行くにつれ、発信受信が同時並行的に行われることもあれば、発信が先ということもあるようにはなる。しかし、日本儒学にとってまず第一になすべきことは儒書を読み、解読することである。[17] これを唐音に照らし合わせてみると、徂徠や春台にとっては儒書唐音音読の提唱と実践こそが第一の急務であったことが浮き彫りになってくる。それと同時に、彼らには漢詩文作成における唐音音読のことを真正面から取り上げる姿勢が、少なくともはっきりとは認められない理由が、儒書唐音音読の先行にあったということも知られるのである。[18] ただし、古来日本儒学においては受信だけでなく発信もまた重要にして不可欠なものであった。優れた漢詩文を作れるということは儒者最高の名誉であった。ここから、受信＝儒書読書に不可欠とされる唐音音読が、発信＝漢詩文作成においても有用なのかどうかは、遅かれ早かれ儒学界では必ず取り上げられる問題であったこと、そして、中南当時は既に議論が進み、不要論まで出されるくらいになっていたこと、そのため唐音論者の中南は漢詩文作成における唐音の必要性を強調せざるをえなくなっていたことなどが、明らかになってくるのである。

4―2―3 中南の位置

このような受信発信に関わる背景を考慮しながら、本節4―2での中南の位置付けを改めて見てみると、唐音音読論の歴史において中南は次のような位置にいたと考えられる。

唐音音読論の深化とともに、受信の第一歩である儒書音読面だけでなく、発信面である漢詩文作成におけるその学的効用も問われるようになった。そのような時代において、中南は、徂徠や春台達の儒書唐音音読論を受けつつ、漢詩文作成における唐音音読に対して出された不要論への反論を行い、またその意義・必要性を強く訴えかけて、唐音音読論をさらに発展させた。

5 今後の課題

唐音音読について論じた儒者は、もとより徂徠春台また中南だけでない。本稿で折々触れた唐音学習の先駆者芳州や朱子学者北海、また本稿では触れなかったが古義学の流れをくむ原双桂（1718～1767）などには、中南と関わる言及が少なくない。一方、古文辞学派の内には、徂徠や春台を受け、積極的に唐音音読論を推進した人物はいない。今後は、唐音音読論の展開における中南の位置をさらに詳しく把握するために、彼と徂徠や春台だけでなくその外の儒者との関係を明らかにしていきたい。

注

（1） 中南における唐音については、既に石崎（一七〇―二頁）に論がある。

（2） ただし、内題は上巻のみならず中巻下巻も「日新堂学範巻上」となっている。

（3） 中南は文雄（1700～63）著一七四四年（延享一）刊『磨光韻鏡』を称賛している（上二五ウ）ことや、『磨光韻鏡』は日本で初めて本格的に唐音を用いた『韻鏡』の研究を行っていること、文雄は漢字音に関して後世に絶大な影響を

与えていることなどから、「唐音知ラヌ者ノ韻鏡ヲ」以下は『磨光韻鏡』等、文雄を踏まえた発言と見られる。

（4）なお、中南は「声律」に関する唐音について、しばしば「和音」や「和歌」（中七ウ、中十七ウ、2―2―4）など、日本古来のものを引き合いに出しながら論じている。

（5）なお、ここで中南は「（大潮和尚は）其ノ比（ゴロ）岡島ナドノ通事ノヨキ人アリテ、徂徠ナド、切磋シテ（唐音を）学ビシ人ナリ（中十七オ）」と述べている。これに対して、徂徠は大潮を自身の唐音の師としている（石崎一一六頁）。徂徠はあるいは大潮に敬意を表して自身の師としたのかもしれないが、徂徠の言及に従うところ、儒学における唐音音読の第一の提唱者徂徠からして改正唐音を用いていたのでないかということになる。徂徠は韻学に対して並々でない関心を持っていたことからしても、その可能性は高いように思われる。ただし、唐音を韻学に結びつけることを刊行書で初めて明言したのは、春台（一七二八（享保十三）年刊『倭読要領』）である。また、韻学と唐音を実際にかつ全面的に結びつけたのは文雄の『磨光韻鏡』が最初である。これらのことを顧みると、儒学における改正唐音使用の開始は、春台以降とも文雄以降とも考えうる。

（6）徂徠は「屈子」「橘子」の唐音はともにケツウであることを利用したが、南郭は後者を「屈原」に変えてしまったという（中十八オ）。

（7）gからも知られるように、徂徠の弟子でありながら南郭は唐音音読があまりできなかったようである（石崎一二〇頁）。中南の南郭非難の背景には、それに対する強い反発があったのかもしれない。

（8）これはもとより、徂徠以前の近世儒学において儒書唐音音読が行われていなかったなどということを言うものではない。提唱と呼べるほどに儒学界に対して唐音音読を強く主張した人物は、徂徠以前にはいなかったということを述べているだけである。ちなみに、例えば雨森芳州（1668～1755）は、その著一七八六（天明六）年刊『橘窓茶話』（四〇四頁）で次のように述べている。「書ハ直読ヨリ善クハ莫シ。否レバ則チ字義ノ精粗詞路ノ逆順、何ニ由リテカ知ルコトヲ得ン」これも儒書唐音音読論を述べているものと解せられる。

（9）なお、徂徠の発言かどうか確認できないが、彼の言葉を弟子が集めたと推察される一七三八（元文三）年刊『訓訳示蒙』には、次のような一文がある。「今時大儒トヨバル、モノ書タル文又ハ書ヲ講ズルニ誤リ多ク、又ハ儒道ヲ行フトテアシキ風俗ニナルモ、皆唐人詞ヲ合点セズ、笑（すカ）シク心得ルユヘナリ。故ニ此訳文ヲ学バズシテ、書籍ヲ見テ理ノ高妙ヲ談ジ、詩ヲ作リテ巧ミナラン事ヲ欲スルハ、タトヘバ倭語ヲ知ラヌ唐人ガ倭ノ双紙ヲ学ビ、歌ヲ上手ニナラ

ント云ガゴトシ（四四〇頁）」。ここには唐音という語は現れていない。しかし、日本人が立派な漢詩文を作るためには中国語によく通じていなければならないという文意の内には、あるいは、唐音音読がよくできなければよい漢詩文を作ることはできないという意が含まれていると言えるのかもしれない。また、2―3fから、徂徠は唐音音読が漢詩文作成に大いに役立つと考えていたのでないかと見ることが許されるのかもしれない。

(10) なお、徂徠門下でないが熱心な唐音音読論者だった秋山玉山（1702～63）も、一七五九（宝暦九）年刊『時習館学規』（二〇四・二一〇・二一一頁）で、唐音音読学習を必修としながらも、その師が得られないため実現できない旨のことを述べている。

(11) 湯浅常山（1708～81）著一七四九・五三年等成立『文会雑記』の次の記事は、徂徠が儒書における唐音音読にのみに関心があった、ないし少なくともそれを第一にしていたことを示すものと言えようか。「子式、華音ノコトヲ徠翁ニ問シニ、イヤイヤマアヒントント詩ヲウタヘバ、モツタイガアリテ、子式ハ華音ヲ知リタルホドニ、詩上手ナルラント人ガ思ント笑ハレタリ（二五五頁）」なお、子式は徂徠の弟子高野蘭亭（1704～57）。

(12) なお、中南と同様、単に唐音や唐話に通じているだけでは、優れた漢詩文は作れないと述べている儒者は外にもいる。

i 雨森芳州 一七八九（寛政一）年刊『たはれぐさ』

もろこしのことばしらずして、詩作り、文かく事なるまじと、もろこしことばまなべる人は、必いへるを、もろこしのことばしりたる人の、詩文を見るに、さまでかはりたる事なければと、またある人のいへる、これはみなそのひと方のみを、しれることばなるべし。詩文は言葉の精華なるものなれば、言葉をしらずして、いかでか精華をもとむべき。…されど詩文をよくせぬもろこし人、いかほどもあれば、もろこしことばしりたるとて、詩文をよくすべきにもあらず。まことの詩文といへるは、もろこしのことばしりて、しかも才学すぐれたる、安倍のなにがし、釈空海などいへる人こそ、はぢがほすくなかるべけれ。それがし、もろこしことばすこしまなびたれど、詩作り、文かく事はしらざるゆゑ、それがしのつたなきを見て、もろこしことばすてたまふなと、同志の人には、つねにかたりき。二三二頁

ii 常山『文会雑記』

子綽云、長崎ヘ遊学シ華音ヲモ聞タリ。十有余年已前ノコトナリ。訳者ドモ出合タルニ中々アノ如クニテ用ニタツコト非ズ。華人ノ詩モ下手多シ。華音ト訳学ト知リタリトテ、文章用ニ立ズト、其頃ヨリ看破セリト也 二一一

七頁

唐音に関し、中南と彼らとの関係は未詳である。なお、『文会雑記』中の子綽（大内熊耳（1697～1776））は徂徠門下なので、通訳などの唐音については古文辞学派にも中南と同様の見方を持っていた儒者のいたことが知られる。

(13) 彼以外にも同様の意見を述べている人物はいる。例えば、芳州著『橘窓茶話』（四〇四頁）、江村北海（1713～88）著一七八三（天明三）年刊『授業編』「唐音」（六一五～七頁）など。なお、中南と芳州や北海との関係は未詳。

(14) なお、当時不要論が出されていたことは、注(12)iからもうかがわれる。また、『授業編』（六一二、六一五頁）参照。

(15) 例えば徂徠は「学者の先務は、唯だ華人の言語に就きて、其の本来の面目を識らんことを要す」（『筌蹄』五四八頁、戸川芳郎訓読）と述べている。中国生まれの学問の「本来の面目」を知るには、「華人の言語」で書かれた古典を、中国人がそうするように中国語の音すなわち唐音で読むことが、何よりもまず必要にして不可欠とされたはずである。

(16) なお、例えば近世の場合、実際に用いられたその唐音は明代音か清代音以外の何ものでもない。したがって、それを用いて中国古典を読むことについて、その是非が問われてもよかったはずである。しかし、少なくとも当時の儒者には中国音の歴史的変化に対する認識はなかった、ないし、極めて薄かった。韻学においても事情は同様であった。そのため、結局そのことは儒学において問題にされることがないまま終わった。

(17) 注(15)

(18) もちろんこの外、例えば職務上のこと、個人的性向のことなど他にも理由があった可能性があるが、この点については後稿で考えたい。

［資料］

『学問捷径』：『江戸時代支那学入門書解題集成』第三集一九七五年汲古書院
『橘窓茶話』：『日本随筆大成』第二期第七巻一九七四年吉川弘文館
『蘐園随筆』：『荻生徂徠全集』第十七巻一九七四年みすず書房
『時習館学規』：『日本教育文庫』「学校編」一九七七年日本図書センター
『授業編』：『日本教育文庫』「学校編」一九七七年日本図書センター

『斥非』：『日本思想大系徂徠学派』一九七二年岩波書店
『たはれぐさ』：『日本随筆大成』第二期第十三巻一九七四年吉川弘文館
『文会雑記』：『日本随筆大成』第一期第一四巻一九七五年吉川弘文館
『訳文筌蹄』「初編」『訓訳示蒙』『韻概』：『荻生徂徠全集』第三巻一九七四年みすず書房
『倭読要領』一九七九年勉誠社

［参考文献］

石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』一九六七年清水弘文堂書房（原刊一九四〇年）
今中寛司『徂徠学の史的研究』一九九二年思文閣出版